

性別適合手術前後における心理的変容

—ロールシャッハ法を通しての検討—

A study of psychological transformation before and after

Sex Reassignment Surgery

—Consideration through the Rorschach method—

土屋 満知

愛知みずほ大学人間科学部

Machi TSUCHIYA

Faculty of Human Science, Aichi Mizuho College

要旨

生物学的性別と性別意識や性別役割が一致しない状態は、従来「性同一性障害」と言われていたが、現在、国際的には「性別違和 (Gender Dysphoria)」、「性別不合 (Gender Incongruence)」という用語が使用されている。治療の一つとしてホルモン療法や性別適合手術(SRS)といった身体的治療が実施される場合があるが、本研究の目的は、SRS が性別違和の心理的適応にどのような影響を及ぼすかについて検討することである。SRS 実施前後の1事例(20代大学生)のロールシャッハ法の比較検討を行った結果、①量的分析では、反応数や反応時間の減少、F%、F+%、R+%の上昇、M-反応やm反応、CF反応の減少、反応内容ではBI反応の減少などが見られた。②質的分析では、色彩に対し情緒的統制が乱されない形への対処に変化し、性同一性の混乱が緩和された。一方で、③混乱よりはマイルドなあり方であるが、性同一性の揺らぎは完全には消失するわけではないことが示された。④身体的反応や心気症的な不安はSRS後のロールシャッハ法に強く見られたことから、SRSを受けても完全には満たされない身体に対する不適合感が示唆された。SRSは性別違和の心理的な安定に寄与すると考えられるが、青年期という発達時期もあり、identity確立という長いプロセスと時間を要する課題は残されていることがうかがえた。

キーワード: 性別違和; 性別適合手術; 心理的変容; ロールシャッハ法

I. 問題と目的

生物学的性別と性別意識や性別役割が一致しておらず、本人が強い苦痛を感じている状態を捉える概念として、従来は「性同一性障害」という用語が用いられてきた。この疾患名は、アメリカ精神医学会が作成している精神疾患の診断基準であるDSM-5(2013)に

おいて「性別違和 (Gender Dysphoria, 以下GDと略)」に変更され、「反対のジェンダーになりたいという強い欲求、または自分とは違うジェンダーであるという主張」が診断基準の一つとして挙げられている。2018年にはWHOの疾患分類であるICD-11が発表され、「Gender Incongruence (性別不合)」という新

たな名称になっている。我が国では「性同一性障害」が未だに用いられている場合もあるが、本研究では「性別違和 (GD)」という疾患名を使用する。

GD の治療は主に精神療法を中心とした精神科的治療、ホルモン療法、手術療法の3種類がある (針間, 2021; 山内, 2001)。当事者らは、自らの性に対する違和感や不快感といった内面的な苦悩や周囲からの無理解・偏見といった社会的苦悩など、様々な悩みを抱えており、効果的な支援を行うためには、彼らの心理面の特徴や適応について、十分理解する必要がある。GD の心理的特徴について検討するための方法として、心理検査を用いたアプローチがなされており、対象関係や思考のあり方、自我機能の評価などを行うためにロールシャッハ法が用いられている。佐々木 (2008) は、ロールシャッハ法は、外的刺激への対応パターンや精神力動を読み取れるため、GD の RLE (Real Life Experience: 実生活経験) やカミングアウトをサポートする際の予測材料として役立つと述べている。

Murray, JF (1985) は、男性 GD 群、男性境界例群、大学生統制群のロールシャッハデータを比較し、GD は境界性人格障害に類似の人格構造を持っていることを指摘している。Tuber, S. & Coates, S. (1989) は、GD の男児のロールシャッハ法において、悪意に満ちた反応を産出しやすく、思考障害が見られることに言及している。これらは GD の心理面の特徴として、性同一性の混乱に加え、人格形成においても何らかの障害があることを示唆している。日本においては、庄野 (2001) が GD にロールシャッハ法、MPI を施行した 50 例の結果を分析し、吉野・中平・織田・鈴木・田近・有木・木下 (2008) は、GD82 名と日本人成人 160 名のロールシャッハ法を比較検討し、GD の心理的特性を提示している。また、中平・吉野・織田・鈴木・田近・有木・木下 (2008) や土屋・二宮・岡田・寺嶋 (2009) は FTM (女性から男性への移行を望む人, Female to Male の略) と MTF (男性から女性への移行を望む人, Male to Female の略) における心理特性の違いについて、ロールシャッハ法を通して明らかにしている。

これら国内外の研究は、GD の心理的側面を捉えたものであるが、性別適合手術 (Sex Reassignment Surgery, 以下 SRS と略) などの身体的治療後の心理的側面への影響については論じられていない。難波 (2016) は、性別違和に対して SRS を行うことにより、理想とするボディイメージに近づき、精神的な安定を得ることができることを指摘している。さらに、難波 (2021) は、保険適用下で乳房切除術を行った FTM 患者に対して、質問紙法を用いて術前・術後の 1 ヶ月時での比較調査を行い、SRS が心理領域での改善、性別違和の軽減、うつ傾向の軽減に役立つと述べている。

SRS の実施については、慎重な判断が必要とされ、それですべての問題が解決するわけではないが、GD の治療として一定の成果をあげていると推測される。

本研究では、SRS 実施前後のロールシャッハ法を比較することにより、SRS が GD の心理的適応に及ぼす影響について検討することが目的である。

II. 事例および研究方法

1. 研究協力者

性別違和 (FTM), 20 代前半, 大学生 A. 短髪で、男性的な服装。身長は高くはないが、筋肉質な体つき。男性口調で話し、声も男性的で高くない。外見的特徴からは、SRS 実施前の初回検査時において、身体的に女性であることは全くわからない。

2. 事例概要

幼稚園頃から女の子であることに對し、違和感があった。好きになるのは女の子で、園の制服のスカートが嫌で、毎朝ぐずって母親を困らせていた。男の子のように立小便ができず、座って排尿するのが嫌だった。小学校は男の子のような服装で通学し、男子に混じって野球をして遊んだ。小学校高学年で初潮がくると、女性であると突きつけられたように感じ、ショックで自殺願望が湧いた。高校卒業前に家族には性別違和についてカミングアウトした。大学には女性として入学したが、精神科を受診し、ホルモン療法を開始。戸籍上の名前を男性名に変更した。数年後、外国に渡航し、SRS (乳腺切除、卵巣・子宮摘出手術) を受けた。

A の通う大学関係者からは、学生同士の人間関係において特に問題となるようなパーソナリティ上の問題はなく、交友関係は自然であるとの情報を得ている。

3. 心理検査の実施の経緯

研究協力者 A に対し、筆者が 2 度の心理検査を実施した。A の指導教官であった B 教授から筆者に対し、A が自身のパーソナリティ特徴や現在の心理的適応について心理検査を受けることを希望していると検査実施の依頼があった。筆者と A の大学との間に一切の関係性はなく、A とは初回検査時が初対面であった。

4. 研究方法

A は、X 年に海外に渡航し SRS を受ける。X 年-5 ヶ月に初回の、X 年+1 年 4 ヶ月に 2 回目のロールシャッハ法を実施した。ロールシャッハ法のスコアリングはいずれも名大式技法によった。SRS 前後に実施した 2 回のロールシャッハ法について、量的分析および質的分析を行い、その比較・検討を行った。

5. 倫理的配慮

事例はプライバシーを考慮し、その本質を損なわない範囲内で修正を加えた。本事例の発表については、本人から口頭ならびに文書にて同意・承諾を得ている。

Ⅲ. 結果および検討

SRS 実施前後に実施した 2 度のロールシャッハ法指標を表 1 に示す。プロトコルについては、SRS 実施前の結果を表 2 に、SRS 実施後を表 3 に示す。

1. SRS 実施前の特徴

(1) ロールシャッハ法の量的分析からの検討

一般的な平均反応数は 20~45 程度だが、日本人はもう少し低い値が多いことからすると、反応数 53 は多い。Response 段階での総反応時間も 40 分 45 秒と比較的長めである。成人の F% は通常 40~60% の範囲内であるが、F%=30.2% であり、低い F% を示している。F+% = 12.5%, R+% = 24.5% であり、反応の質は不良である。また、M=13 と多いが、M+ 反応 5 に対し、M- 反応 8 とその多くが M- である。M:FM = 13:4 と M > FM であり、一見すると内的な統制は取れているように思われるが、M- 反応が多いことを鑑みると、その統制は不十分と言わざるを得ない。m 反応は 8 (Fm=4, mF=4) とその多さが特徴的である。Klopper & Kelley (1942) は、2 つ以上の m 反応は、パーソナリティをおびやかすような、制御し得ない力の認識を反映すること、m 反応が欲求不満や内的緊張に関係すると指摘しているように、葛藤の大きさを表わしていると考えられる。さらに、FC:CF+C = 6:6 であり、CF+C が 5 個以上と多く示されていることから、感情が豊かであるが、情緒的刺激を適当な形で外に向かって表出することが苦手であり、外的な統制の弱さがうかがわれる。

これらの特徴からは、自分自身の内的な刺激からも、外界刺激からも揺り動かされやすく、それが現実吟味力の弱さや情緒面の不安定さに繋がっていると考えられる。体験型は M:ΣC = 13:9 と両向型で、この特徴からも内的にも外的にも感受性があり、揺さぶられやすい特徴を持つことが明らかである。一方で、P=5 と平凡反応は平均的な結果であり、常識性や他者との協調性など健康的な力も合わせ持っていると言える。

個人の感情的構造を明らかにしようとする感情カテゴリー Affect に注目すると、中性感情 Neutral = 24.5% と低い、Hostility (敵意感情) = 33.3% であり、名古屋ロールシャッハ法研究会 (2018) の標準化時の出現比率 19.3% と比して高い。Hostility, Anxiety (不安感情) と Bodily Preoccupation (身体的関心) を合わせた Total Unpleasant% = 64.8% であり、名大法の出現比率 (54.7%) と比すると、不快感情が付加された反応産出が多めである。

(2) ロールシャッハ法の質的分析からの検討

第 I 図版の初発反応は、「悪魔。全体的に悪魔の顔。牙、吊り上がった目、鼻。色も黒くて悪い、怖いイメ

表 1. SRS 実施前後のロールシャッハ法指標

	SRS 実施前	SRS 実施後
R	53	45
Rej	0	0
Tur%	45.3%	42.2%
Tot.time	40'45"	19'19"
Av.T/1R	19.0"	15.8"
Av.T/ach	16.0"	16.6"
Av.T/ch	22.0"	15.0"
VIII・IX・X/R%	34.0%	37.8%
Content Range	20	18
W%・D%・Dd%	35.8%・54.7%・7.5%	33.3%・51.1%・11.1%
F%・F+%・R+%	30.2%・12.5%・24.5%	51.1%・21.7%・33.3%
W:M	19:13	15:8
M:FM	13:4	8:6
m 系反応	Fm=4・mF=4	Fm=0・mF=0
M:ΣC	13:9	8:4
FC:CF+C	6:6	8:0
P	5	5
A%・H%	39.6%・26.4%	46.7%・22.2%
Hostility%	33.3%	17.1%
Anxiety%	27.8%	31.7%
Bodily preoccupation%	3.7%	7.3%
Total unpleasant%	64.8%	56.1%
Dependency%	5.6%	4.9%
Positive feeling%	22.2%	26.8%
Miscellaneous%	7.4%	12.2%
N%	24.5%	26.7%

ージ」から始まる。第 3 反応は「悪魔が住んでいそうな城」、第 4 反応は「悪魔と関係する。…あざ笑っている。けなしたように」と、第 1 反応の「悪魔」を完全に切り離せず、作話的方向の反応になっていく。また、図版 I を self image card に選び「悪魔に感じるのが自分の悪い所と重なった」と述べ、response においても「黒色しか使っていない怖さ、黒い、闇というイメージ」という感想を述べている。大きな思考の崩れは見られないものの、最初に出会うロールシャッハ図版 I に対し、非常に negative な反応を見せており、外界に対する警戒感や緊張感が示されていると考えられる。この外界イメージはさらに、「飛び散った血。暴力的。危害加わった印象なのが嫌(II⑤)」、「悪い人みたいな印象が。麻薬やっついそうなヘビメタ、パンク系の奇抜系の男。反社会的な人(III⑥)」、「呪われているような印象(IV①)」、「得体の知れない生物(IV②)」というように、外界に対する脅威や不安感を感じさせ、対象関係の障害を示唆する反応が他の図版でも多く生じている。

図版 II・III・V・VII では知覚したものを明確に同定できない反応が見られている。「人のような獣のような(II②)」、「人っていうか、猿、オラウータンっていう風にも見えなくもないし、ハイヒール履いているように

見えるし、にも見えるし、どちらかと言うと、女性に見えます(Ⅲ③)、「鳥のようにも、蝶のようにも見える(V①)」、「ポニーテールの女の。なぜこんなに髪の毛が上にあがっているのか。…高い所から女の子が落ちているのか、ポニーテールが上にあがっているのか(VII①)」。このように、外界刺激をしっかりと自信を持って認知・知覚し、適度に距離を取ることができておらず、心理的な混乱が示されている。

さらに、男の心（他を威圧するような心、攻撃的な心、意欲的に達成しようとする心）と女の心（優しく包み込む心、可愛いらしいものを愛おしむ心）の両者の間での心の揺らぎが多く見られている。「強そうな大きい怪物を下から見上げている(IV①)」、「衣装を着た人って女の人のっぽい。小林幸子じゃないけど(V②)」、「一部分、男性器(V⑤)」、「飾りがいっぱいいつている。剣が台座か何かに突き刺さっている(VI②)」、「派手なうちわ(VI④)」、「洋風の電気スタンド(VII③)」、「小さな子が描いた犬みたいなの(VII⑤)」、「てっぺんに片手を高く上げた2人が、背中合わせか横に立っている。拳を突き上げて威勢がいい(VIII②)」、「何かの花(VIII③)」、「リスか兎か小動物(X⑦)」。

最初の色彩図版であるⅡ・Ⅲには「火」や「血液」反応が見られ、後半の色彩図版では「よじ登っている熊が、てっぺんにいる人を見つめ、狙っている。人が武器を持って頂点に立っているように見えるので、自然界の頂点に人が立とうとしている高慢な印象。熊が前片足を怪我、血を流している(VIII⑤)」、「長い帽子を被った武器を持った人が向かい合わせに立っている。喉元に銃か何かを突きつけられている(IX⑤)」という反応がある。現実吟味にそれほどの崩れはないものの、安定できない素地を持つ思考の恣意性や作話傾向を伴った反応であり、いずれもうっ積している、あるいは本来的に自分の内にある高い攻撃性や衝動性が示されていると考えられる。

図版Vの「④水面ギリギリに飛んでいる鳥とその鳥が水面に映っている」は、vista反応が生じており、自身を内省し、客観的に自己を見つめる力の反映と考えられる。しかし、それはまさにギリギリの心理状態の表れであり、SRS実施前のロールシャッハ反応には、性同一性の混乱が如実に表れている。

2. SRS実施後の特徴

(1) ロールシャッハ法の量的分析からの検討

R=45であり、一般的な平均反応数である20~45の範囲内に一応、収まっている。Response段階での総反応時間も19分19秒とそれほど長くない。F%=51.1%と成人のF%の平均の範囲内(通常40~60%)の結果を示している。F+%=21.7%、R+%=33.3%

は低い値であり、質が良好な反応は少ない。M=8(M+=4, M-=4)と、内的安定性や他者への共感能力などを意味するM+反応を半数は産出することが可能になっている。さらに、m=0となっており、不安を伴う心の緊張や葛藤が緩和されていることが示唆される。一方、FC:CF+C=8:0と統制力を欠いた色彩反応はなくなり、すべてFC反応となっている。外界からの情緒刺激に対して統制の取れる形で反応できており、現実的な対処が可能になっている。感情カテゴリー-AffectではHostility(敵意感情)=17.1%であり、名古屋ロールシャッハ法研究会(2018)の標準化時の出現比率19.3%よりも低くなっている。Hostility, Anxiety(不安感情)とBodily Preoccupation(身体的関心)を合わせたTotal Unpleasant%は56.1%で、名大法の出現比率(54.7%)とほぼ同程度の値を示しており、不快な感情が付加された反応は、平均的な範囲内と言える。

以上から、現実吟味力の弱さはあるものの、ある程度の内面の安定が示されている。平凡反応はP=5であり、常識的な考え方ができるなど、健康的なあり方も初回検査時と変わらず見られている。

(2) ロールシャッハ法の質的分析からの検討

第I図版の初発反応は、「悪魔のような」から始まるが、初回検査時に見られた「怖い」などといった情緒的表現はなされず、「形的に」と悪魔の顔に見えた形態と色彩について明確に説明を行っている。続く図版では「戦闘機のような乗り物にも(II②)」、「カマキリの昆虫…虫を食べる鋭い牙…(III③)」、「潰れた馬面のコウモリ(IV②)」、「死にかけの蝶(V②)」、「かっこいい西洋の剣が台座に刺さっている(VI③)」、「ラジオペンチ(X⑦)」などと、その内容からは、内的な攻撃性や不安感が示唆されるが、外界への脅威を感じさせるほどではなく、表現がマイルドになっている。self image cardとmost liked cardともに図版Xであり、最も好きな図版を自己イメージカードに選んでいる。

図版IIでは、「②真ん中の白い部分、エイのような動物にも戦闘機のような乗り物にも」と反応し、エイか戦闘機かを同定できない。しかし、初回検査時と比較すると、知覚したものを明確に同定できない反応は少なくなっている。SRS実施前は図版II・IIIにおいて人間か動物かはっきりせず、人の性別が混乱していたが、2回目においては、そのような様子は見られていない。「黒い服を着て、赤い変な覆面を被ったおじさんが2人、手を合わせながら踊っている(II)」と「おじさん」を知覚し、「女の人がダボツとした服を着て、昔のお笑いのようなキャインのような(III)」と「女性」と断定できている。しかし、図版VIIIの「がたいのいい男の

表 2. SRS 実施前のロールシャッハ法プロトコル (一部省略)

NO	Time	Pos	Response	Inquiry	Lo.	De.	Co.	P	Affect
I	25"	△ 裏	①悪魔。	①全体的に悪魔の顔。牙、吊り上った目、鼻。色も黒くて、悪い、怖いイメージ。	①WS	FC'+	Hd/		Athr
	56"	▽ >	②真ん中に人が背中合わせに立っている。	②頭、手、ウエスト、スカートか何か履いて、足、背中、胸、腹。	②D1	M+	H Cg		N
	1'12"	△	③黒色しか使ってない怖さ、黒、闇のイメージ。	感想。					
	1'45"	▽	③大きな建物に見えなくもないです。船っぽくも見えます。	③悪魔(①)が住んでいそうな城。屋根のつぺん。窓、門。水面で、船にも建物にも見える。大きい船の真正面から見た先端。	③WS	F-	Arch Tr Nat		Mi
	2'10" (2'25")	△ >	④牙と吊り上った目。上の突き出ている部分が耳か何かで、あざ笑っている。	④牙で、悪魔(①)と関係する。吊り上った目、大きい耳。口角が上がっている、あざ笑っている。けなしたように。	④WS	M-	Hd/		Athr Hh
II	35"	△ 裏 △	裏をじっと見る。 ①赤い部分が、血か炎に感じます。	①上は燃えている蠟燭の炎。下は飛び散った血。上に向かって細くなっている、炎っぽい、熊みたいな、体格のいい人が手を合わせて、足から出ている血か。人にも見えるし、獣にも。	①W	M- CF Fm	Fi Bl H		Hh Hha
	50"	△	②2人、2匹、人のような獣のような、手を合わせて向かい合っている。	②赤帽子をかぶった。両手を合わせて、肩、背中、膝、足、もう片足。赤い炎にも赤い帽子にも見える。体がゴツイので熊のよう。	②W	M'+ FC	A Cg Fi	P	Athr
	1'35"	▽	③骨盤みたいな骨のように見えます。	③黒い部分。尾骨、骨盤の腸骨で。	③D1+1	F-	Atb·Sc		Bb
	1'50"	▽	④蝶みたいな、蛾みたいな。嫌な印象。	④触覚で、羽で、尻尾。<Q>色。黒と赤で、形も不恰好。蛾とか蝶、嫌いなので。	④W	FC- FC'	A		Adis
	2'25"	△回転	好きではない。嫌な印象がある。	感想。					
	2'35"	△	⑤赤い部分が飛び散った血。	⑤怪我させられた。事故、怪我っていうか、暴力的。危害が加わった印象なのが嫌だ。	⑤D4	mF- CF	Bl		Hha
	3'20" (3'45")	▽	⑥白い部分(S)が、駒かエイミみたいな動物に見えます。	⑥駒。駒の下の軸で、本体で回っている。駒にも見えるし、エイ。翼、胴体、頭、こっちは尻尾。エイだったら周りが暗い海。	⑥DS5	Fm-	Toy A		N
	10" 45"	△	①女の人？が2人向かい合って、ダンスなのか儀式なのか…横の赤いのが炎っぽく見えて。	①儀式的炎。女の人の頭、首、反っている背中、お尻を突き出してハイヒールで、胸で手で。真ん中の赤い部分リボン。	①W	M+	H Orn Fi	P	Drel Porn Hh
	1'00"	△ 裏	②昆虫みたいな。	②昆虫の目で、トゲトゲした所が口の歯みたいな。	②dr	F-	Ad/		Hor
	1'35"	△	③人っていうか、猿、オラウータンっていう風にも見えなくもないし、ハイヒール履いているように見えるし、男にも見えるし、どちらかと言うと、女性に見えます。	③全体的に毛深い、表面の毛羽ついた感じが、毛みたいな質感に見えて。顔も真っ黒で、輪郭も猿、オラウータンのような口が突き出たよう。胸とハイヒール、足、ラインが細くて女の人にも、動物にも見えるし、足の付け根の所が男性の象徴にも見えるし。でも不自然。胸板厚い。どちらかと言うと、女の人。	③D1+1	FT- FC'	H Cg		N
2'15"	△ 回転	④化物っていうか、目、鼻、不気味に笑っている口に見えます。	④目で鼻で、触覚じゃないけど、目の横に。口の端が上にあがっている、笑っている。人間じゃない化物の気がする。	④W	M-	Hd/		Athr	
3'10"	▽	⑤モヒカンみたいな奇抜なヘアースタイルの人が足を上げて座っている。	⑤トゲトゲした人のモヒカン。頭、後頭部、顔、髭、細目の首。何かにもたれている。お尻。足を顔の前まで上げている。胸、腹。	⑤D5+5 +6+9+9	M-	H		N	
3'45" (4'25")	▽ 回転	⑥赤い部分が血っぽく見えます。髭も生えているように見えます。悪い人みたいな印象が。	⑥血、飛び散って垂れる。(⑤が)悪い人に見えるので、人を刃物で刺して傷つけ、血の印象。モヒカンの人が悪い人の印象。色も黒いし、トゲトゲした角ばった印象。殺人じゃないけど、麻薬やってそうなヘビメタ、バンク系の奇抜系の男。反社会的な人。	⑥D2+2	mF- FC' CF	Bl		Hha	
IV	10" 35"	△	①強そうな大きい怪獣を下から見上げていて。呪われているような印象しますね。	①頭、腕、見上げていて足が大きく見える。太い尻尾。<Q>黒い怪獣。強い、硬く強い。呪われて襲いかかっている。	①W	FC'+ FT	A/		Athr
	50"	▽	②得体の知れない生物っぽい。	②頭で、触覚みたいな出ている、手なのか、翼なのか、体の一部。世界中探したいような得たいの知れない動物。	②W	F-	A/		Afant
	1'10"	▽	③左右対称に動物が、ゴリラのような猿のような、コウモリみたいな動物が。	③猿。後頭部、手を上げていて、足、2匹。コウモリは手で足で羽。コウモリが見えるので、コウモリが飛んでいる、夜。	③D1	F-	A		Mi
	2'10" (2'50")	△ <	④見下ろされている。威圧感。大きい怪獣みたいな。	④最初の怪獣(①)に対して、自分が(カードの中に)入ると、これぐらい。怪獣の左目。<右目は？>右はない。片目。	④W	FV-	A/		Athr
	V	20"	△	①鳥のようにも、蝶のようにも見える。	①蝶の触覚、胴体、羽、アゲハ蝶の下の部分。鳥の頭にも見えるし、胴体で、鳥の足にも。	①W	F-	A	P
55"		△	②衣装を着た人って、女の人っぽい。小林幸子じゃないけど…。	②頭、頭につけた派手な飾りで、色が付いたら派手。真っ暗なので、スクリーンの後ろから光が当てられてシルエット。	②W	FC'-	H Orn		Porn Acnph
1'20"		▽	③下を隠すとカニっぽく見える。	③カニの目があって、大きいハサミ。もし、下があったら(甲羅の形をしていたら)胴体で足がありそう。	③dr	F-	A		Hha
2'20"		<	④水面ギリギリに飛んでいる鳥とその鳥が水面に映っている。	④鶴の頭、尾、大きく広げた翼。水面から飛び立とうとしている。	④W	FM- FV	A Nat		N
2'45"		△	今までの黒は、暗いって感じだったけど、これは黒っていうイメージ抱かないですね。	感想。					
3'45" (4'15")	△	⑤一部分、男性器にも見えなくもないです。	⑤2つ。(カードの他の部分を手で隠し)これだけで見ると。	⑤d2	F-	Sex		BS	
VI	15"	△	①弦楽器みたいな。	①ネックの部分、細いのが弦の長さを調整する所。楽器本体。	①W	F+	Mu		Prec
	25"	△	②飾りがいっぱい付いている。剣が台座か何か突き刺さっている。	②剣だと、飾りで、台座に刺さっている。長い西洋の剣みたい。	②D7	F-	Orn· War		Porn Hh Acnph N
	50"	△	③もみじの葉っぱみたいな。	③大小2枚。黒で、色の濃淡が、もみじの風合いのような。	③W	FC'-	Bot		N
	1'15"	▽	④派手なうちわ。	④羽のような飾り、持つ部分、うちわの羽っていうか、形が尖っていて派手なイメージなので、華美に見せようとしている。	④W	F+	Imp		Porn Acnph
	1'40"	▽	⑤トゲトゲしている。淡い感じの黒なので、石か何かでできていそう。	⑤剣(②)が石でできていそう。淡い色なので、石か何かでできていそう。	⑤W	FC'- FT	Nat		Mi
	2'30" (4'00")	△ 回転 △	よくわからないですね。嫌なイメージ。	感想。					

VII	10"	^	①ポニーテールの女の。なぜこんなに髪の毛が上にあがっているのか。飛び跳ねているのか、落ちているのか？ポニーテールだけ見ると、そんな印象。どちらかと言うと、若い人。色が淡いので暗い印象は抱かないけど、落下しているので不気味、怖い。	①ポニーテールの髪の毛、後頭部、首、目、鼻、顎、顔、胸かな。スカート、足がない。胴体があまり…。首から上の印象が強い。ポニーテールに見えただ、重力に逆らっている。高い所から女の子が落ちているのか、ポニーテールが上にあがっているのか。顎もシャープだし、若そう。このポニーテールの女の人は、お婆さんとか、小さすぎる女の子ではない。色が濃すぎないので、ダークな印象は怖いとか抱かない。ポニーテールが上にあがっているのか、なぜ高い所から落下しようとしているのかって思うと、地面に叩きつけられるのかって思うと、不気味。	①W	M+	H Cg		Abal Hsm	
	35"		②白い部分だけ見ると、夜にお城か何か燃えている感じ。	②お城は屋根しか見えなくて、屋根飾り、煙。炎がメラメラしている。エッジが燃えて、ゴーゴーと。周りが黒いので、お城が燃えている。	②dr	Fm- FY FC'	Fi Sm Arch		Hhat	
	1'05"		③暗い部屋の中に置いてある洋風の電気スタンド。	③ランプの傘。首じゃないけど、ランプの台。	③DS6	F-	Hh Orn		Porn	
	1'30"		④立体的に浮き出て見えますね。	④尻尾で、前足、後ろ足、目で耳。ミニチュアシュナウザー。立体的に浮き出て見える(左側のみ)。口から煙か何かが出ている。<Q>灰色なので煙かなくて。	④D1+3	FV- FY	A Sm		Adif	
	3'40" (4'20")		⑤小さな子が描いた犬みたい。犬が口から煙のような、吐き出している。	⑤さっきと同じ犬(④)が反対向いたのが、1匹、鏡に映って。頭が小さくてバランス悪いから小さい子が描いた絵みたい。	⑤D1+1	F-	A' Art Sm		Dch Pch Adif	
VIII	5" 30"	^	カラフルですね。①両脇の赤いのが、熊が4本足で歩いている。何かをよじ登っている。	①熊は頭、背中、前足、後ろ足。何かによじ登っている。<何匹？>違う熊が2匹。	①D1+1	FM+	A	P	Pst	
	56"		②てっぺんに片手を高く上げた2人が、背中合わせか、横に立っている。拳を突き上げて威勢がいい。手の横にこん棒か何か武器を持ち、片足が見える。	②突き上げた手、頭、ゲジゲジしたのが、こん棒のような武器。この下に片足。天高く手を突き上げていて、ごっつい男の人かな。もう片方の手にこん棒、持っているし、戦っているような。	②dr	M-	H War		HH	
	2'20"		③何かの花。	③花びら、葉っぱ。上にオレンジとピンクの華やかな色があって、下に緑で、植物かな。綺麗な色をしているので花かな。	③D2+6	FC+	Flo	P	Pnat	
	3'00"		④真ん中の青っぽいのが、旗みたいに見えます。	④布製の2枚の古い旗がなびいていて、旗の軸。<Q>端の布がほつれて古くなっているように感じた。威勢がいい人が戦っているの、旗も使い古したような。この人(②)が掲げている旗。	④D6	Fm-	Emb		AgI Daut	
	3'25" 4'20" (4'50")		⑤よじ登っている熊が、てっぺんにいる人を見つめ、狙っている。人が武器を持って、頂点に立っているように見えるので、自然界の頂点に人が立とうとしている傲慢な印象。熊が前片足を怪我、血を流している。	⑤熊の目先に人がいて、人間を獲物として狙って見つめているのが、さっきの熊と人(①と②)。こん棒や武器で、自然界に生きる熊を殺そうとしている。知恵や武器を使って乱獲し、自然を壊そうとしている。熊が怪我させられて、血が染み出している。<Q>人間がこん棒を持っているように見えるので、それによって怪我させられた。ピンクで赤色なので、血に。	⑤D1+1 +3	FM- mF CF	A Bl H		Hha HH Pst	
IX	5" 10"	^	鮮やかですね。①植物のような葉っぱと花びら。	①派手な花びら。緑である程度、大きいので、葉っぱ。植物っていう印象。花びらは、無理やりこじつけて花びらに見えた。	①D1+1	FC+	Flo		Pnat	
	25"		②燃えているような。	②赤いのと、オレンジが燃えている。何が燃えているのかは、さとおき、赤とオレンジ色が。<Q>炎ですね。	②D1+1	CF- mF	Fi		Hh	
	1'12"		③反対にしても、花みたいに見えます。	③葉っぱと花びら。<Q>色。	③D2+6	FC+	Flo		Pnat	
	1'30"		④白い部分(S)を見ると、昆虫のようなトゲトゲした印象が。	④昆虫の頭、足、胴体。改めて見ると、牛の顔にも。<Q>鼻、顔、角。この辺、牛の顔。目は無いですけど。	④DS4	F-	Ad		Hh	
	2'20"		⑤オレンジの部分が、長い帽子をかぶった武器を持った人が向かい合わせて立っている。喉元に銃か何かを突きつけられている。	⑤長い尖った帽子をかぶり、鼻で、のけぞって立っている。銃。誰が持っているかわからないけど、銃の持つ所で、銃を喉元に突きつけられている。上半身と下半身、足は不明瞭。ワンピースみたい、つなぎを着ている。	⑤D1+1	M-	H Cg War		Hsm	
3'07"	^	⑥緑の部分が、大きな翼を付けた人？人が向かい合っているみたい。	⑥頭で、大きな翼で、1人、2人。<Q>翼を背負っている人。<性別？>どっちでもなさそう。中性的な。	⑥D6	M-	H Orn		N		
3'50" (4'20")		VIIIの絵の方が華やかな。こっちのほうが鮮やかだけど、暗い印象。	感想。動物とか、具体的なものに見えないし、ピンとこない。							
X	10" 17" 25"	^	すごい色々な色が使っている。派手ですね。①珊瑚、カニ、エビ、魚、葉っぱ、鳥、色々な動物がいるように見えます。	①珊瑚、カニ、エビ、鳥。この青いのも鳥。葉っぱ。カラフルなんですけど、まとまっていない。白い部分が多いので、独立して見えるけど、全体的に見て。<それぞれ2つずつある？>そうですね。赤いのもエビだし、横に向けると、緑もエビっぽい。尻尾の丸を感じた。	①W	FC+	A Bot		N	
	1'20"		<緑色の、エビっぽい。>							
	1'40"		②真ん中の水色が頭、羽。鳥が向かい合わせている。	②最初の鳥(①)とは別、青い所が頭、口ばし、2羽向かい合っている。胴体、翼。上にバサッと広げた感じ。	②D5+5	FM-	A		N	
	2'20"		③黄色いオレンジ色が目で、オレンジ色が口で。顔にも見える。顔に見えるけど、人間には見えない。	③顔で、目で鼻にも口にも見える。口だとしたら、笑っている感じ。鼻だとしたらヤギみたいな。顎だとしたら、ヤギのような顔。<Q>白いので、白いヤギかな。	③Dds2	M'+ FC'	Ad		Mi	
	2'40"		④さっき、エビに見えていた緑がタツノオトシゴのような竜のような。	④頭、タツノオトシゴのような竜のような。背中合わせに2匹。	④D8	F-	A		N	
			⑤緑色のどこの真ん中の薄い緑が、両手を上げて、頭の上に手を挙げている人にも見える。	⑤手で頭、胴体、足が2本。<どんな人？>ちょっとぼつちやりした女の人っぽい。頭のてっぺんが、髪の毛が。あと、ウエストがくびれているので。	⑤D8	M-	H		N	
	3'25"		⑥赤と赤が交じり合っているのが、動脈血とか血みたいな、血液みたいな。	⑥赤と青と交じり合ったのが。教科書に動脈が赤で静脈が青とかで書いてあるので。	⑥D5+5	CF-	Bl+Sc		Hha	
	4'20"		⑦リスか、兎か、小動物にも見えます。	⑦耳のような、顔、尖っている部分が手。顔の前に手を伸ばしている。<何？>どっちかっていうと、リス。<らしさ？>木の枝の先にいるリス。ここが木の枝にも見えるので。	⑦D11+	F-	A		N	
	4'50" (5'35")		裏 ^	ごちゃごちゃして、まとまっていない印象。						

人が、片手を突き上げて立っている」という反応は、男性的な力強さが感じられるものの、dr 反応であり、非常に小さな部分への反応であることからすると、その勇ましさのエネルギーが大幅に半減している。

前半の色彩図版であるⅡ・Ⅲでは初回時に見られたような赤にダイレクトに反応した「火」や「血液」といった反応は生じず、代わりに「赤い覆面(Ⅱ①)」、「赤い蝶ネクタイ(Ⅲ⑤)」といった外界刺激に対して現実的に対処する形の反応となっている。後半の色彩図版でも、「緑色が木(Ⅷ①)」、「何かの花っぽい。…オレンジで花(Ⅷ⑤)」、「カニの甲羅。赤色と丸い感じ(Ⅸ③)」、「カニと珊瑚とエビと。…赤色で反っていて、緑色のエビ(X②)」というように、反応内容からも内的な攻撃性や衝動性が減り、安定化の方向が感じられる。また、色彩図版ではないが、図版Ⅴの「死にかけの蝶。しおれている」、「水面ギリギリを飛んでいる鳥」という反応からは、不安定な中で何とかバランスを取りながら世界を生き抜いている A の姿を見ることができると言える。

「水面ギリギリを飛ぶ鳥」という反応は、前回同様に見られたが、以前はその後に「男性器」という sex 反応が出ていた。今回はそれが「カニの爪」という反応に変化しており、外界に対する刺激処理において、自我にとって受け入れやすい形での対処・処理に変わってきていると言える。

一方で、「骨盤みたい。腸骨で座骨で恥骨(Ⅱ③)」、「甲状腺(Ⅲ②)」、「腰椎からちょっと仙椎とか骨盤の骨の一部(Ⅳ③)」、「細胞みたいな。オレンジの部分が核で黄色が細胞質(X④)」のように、Atb 反応や Atf 反応に代表される身体反応が、初回検査時よりも多く見られている。これらは、A が大学で生理学を専門的に学んでいたことを差し引いて考えても、身体的な関心が高いことを示しており、SRS を受けても完全に満たされることのない身体への不適合感があることを推測させる。加えて、最終図版である X では、自由反応段階で 9 つもの反応が生じ、inquiry では付加反応までもが生じている。多色でまとまりがない刺激図版である X 図版を統合できず、反応が増加したものと考えられる。

SRS 実施後は、認知の混乱や性同一性の混乱が随分と減り、心理的に安定化の方向が示されている。しかしその一方で、身体への適合感は決して満たされることはないことがわかる。

3. SRS 実施前後の比較

(1) 変化した特徴

SRS 実施前後において、変化が見られたロールシャッハ指標を挙げる。表 1 を見ると、反応時間は約半分に短縮し、F%、F+%、R+% の数値が上昇、

M-反応は減少し、初回検査時は FC=CF=6 だったが CF=0 の FC 優位型へと変化している。m=8 と多く産出されていたが、m=0 となった。反応内容では、BI 反応=3 だったものが、1 つも生じておらず、sex 反応=1 は 0 となっている。Affect は、敵意感情(Hostility)が 33.3%から 17.1%と半減し、不快感情の総計である Total Unpleasant%は 64.8%から 56.1%と、わずかに減少した。これらの特徴からは、現実検討力が増し、内的緊張や欲求不満がマイルドになり、刺激に対する統制が取れるようなあり方に変化したと考えられる。

質的分析における変化も合わせて考えると、色彩図版のⅡ・Ⅲにおいて、初回検査時は「血」、「炎」と、内的な攻撃性や衝動性が直接的にうかがえる反応を見せていたが、再検査時には「赤い変な覆面(Ⅱ)」、「赤い蝶ネクタイ(Ⅲ)」と、情緒的統制の取れた形で反応し、刺激処理を試みることができている。

初回検査時は、男の心と女の心の間で揺れ動き、性同一性の混乱が見られ、図版Ⅲでは「女にも男にも」と性別を同定できない様子であったが、その後の検査では「女の人」というように性別が断定的に述べられており、混乱が和らいでいる。この点は identity 確立に向けた大きな変化の一つであると考えられる。しかし、「がたいのいい男の人(2 回目・Ⅷ②)」にあるように、一見すると力強い男性的なエネルギーを感じさせるものの、実際の反応は dr 反応であり、分割の仕方が独特で稀にしか見られない領域に対する反応である。力強さ、勇ましさといった男性の心は示されるがその脆さが透けており、identity 確立に至る道りは平坦ではないことを感じさせる。

身体反応に関わる Anatomy 反応は、初回は 1 つのみであったが、再検査時には「骨盤(Ⅱ)」、「腰椎から仙椎とかの骨盤の骨の一部(Ⅳ)」という骨格反応や「甲状腺(Ⅲ)」という内臓反応が合わせて 3 つ生じ、増加が見られている。Affect では、身体的関心を示す Bodily preoccupation は 3.7%から 7.3%へ、不安感情の Anxiety も 27.8%から 31.7%と微増を示している。身体的関心の高さや自身の身体に対する心気症的な不安は、SRS 後の方が強く現れている。

SRS 実施後の 2 回目のロールシャッハ法からは、ロールシャッハ指標においても好ましい変化を見せ、性的混乱といった反応は見られなくなっていることから、SRS 実施前と比較すると、現実的な対処方法が可能になっている。全体を通して、心理的な安定が感じられ、適応的の反応へと変化しているが、身体的な関心は SRS 実施後のロールシャッハ法に強く現れており、SRS を受けても完全に満たされることのない身体的な感覚や不安感があると考えられる。

表 3. SRS 実施後のロールシャッハ法プロトコル (一部省略)

NO	Time	Pos	Response	Inquiry	Lo.	De.	Co.	P	Affect
I	25"	△ 回転	①悪魔のような。	①目、耳、輪郭。牙、鼻、角。黒いから悪魔。形的に。	①WS	FC'+	Hd/		Athr
	40"	▽ 回転	②真ん中に女の人が背中合わせになって、手をこう(伸ばす)している。	②2人。頭、手、ウエスト、スカート、足。	②D1	M+	H Cg		N
	1'15" (1'35")	▽	③小さい子が描いた空想の乗り物。	③光りそう、電波出そう。屋根、翼、土台の足、窓。	③WS	F-	Tr・Art		Pch Dch
II	10"	△	①黒い服を着て、赤い変な覆面を被ったおじさんが2人、手を合わせながら踊っている。	①帽子が頭から伸びてニット系の覆面。赤で被っていて、ダボッと、暖かそう。2人膝を合わせている。	①W	M+ FC' FC	H Cg Mask	P	Prec Adef
	30"	△	②真ん中の白い部分(S)、エイのような動物にも戦闘機のような乗り物にも。	②エイなら頭でヒレ、尾びれっぽい。<Q>戦闘機なら頭、翼、尾翼。平べったいステルス系戦闘機。	②DS5	F-	A Tr・War		Hh
	1'05" (1'20")	▽	③黒い部分が骨盤みたい。	③腸骨で座骨で恥骨。ここが骨の空いている所。	③D1+ DS5	F-	Atb・Sc		Bb
III	20"	△	①女の人がダボツとした服を着て、昔のお笑いのようなキヤイーンのような。	①頭、首、背中。ダボツとしたズボン、足。裾がフワツと空いた感じ。袖。	①D1+1	M+ FT	H Cg	P	N
	45"	△	②真ん中の空いた部分、甲状腺。	②蝶の羽を広げたみたいなの所が甲状腺っぽい。	②D4	F-	Atf・Sc		Bf
	1'10"	△	③カマキリの昆虫かな。	③カマキリの目、口、虫を食べる鋭い牙。顔だけ。	③D6	F+	Ad		Hor
	1'30"	△	④全体見ると顔。赤い所が鼻。目で。	④目、鼻、口、笑っている印象。<Q>宇宙人的な。	④D1+4	M-	Hd/		Mi
	2'00" (2'20")	▽	⑤赤い蝶ネクタイをした怪獣が両手を上げている。	⑤赤い蝶ネクタイ。頭、肩、胴で、手が上がっている。	⑤D1+4	M' - FC	A/ Cg		Pch Dch Athr
IV	14"	△	①ウルトラマンに出てきそうな怪獣。	①下から見上げている感じ。頭、上半身、でかい足。尻尾。かなりでかい。<Q>遠近法みたい。	①W	FV+ FC'	A/		Athr
	25"	△	②潰れた馬面のコウモリみたい。	②頭、羽で体。潰れた。床にくっついている感じ。	②W	F-	A		Agl
	55"	▽	③腰椎から仙椎とか骨盤の骨の一部	③腰の骨。腸骨。骨盤の骨の一部。残りも骨の一部。	③W	F-	Atb・Sc		Bb
	1'12"	▽	④猿っぽい動物が寄り添っている。	④2匹。手と頭と胴体、顔、足。猿。類人猿系。	④dr	FM-	A		Pept
	1'40" (2'10")	▽	⑤2匹の猿っぽい動物の下にも動物っぽい、動物が手を広げている。	⑤耳、手、胴体、足。ムササビでもないし、モモンガっぽい。水平に手を上げて大の字になっている。	⑤dr	FM-	A		Mi
V	20"	△	①ド派手な衣装を着た歌手。	①頭で冠じゃないけど、衣装の頭で、衣装の羽で足。	①W	F+	H Cg		Prec Acnph
	33"	△	②死にかけの蝶。しおれている。	②アゲハ蝶の羽の一部がシュンとした感じ。触角。	②W	F+	A	P	Agl
	1'04"	>	③水面ギリギリを飛んでいる鳥。	③鳥の羽で頭。水面があって水面に写っている印象。	③W	FM-FV	A Nat		Abal
	1'24" (1'45")	△	④端っこがカニの爪みたいな感じ。	④カニの爪のハサミ。<何個?>左右で2個。	④dr	F-	Ad		Hh
VI	15"	△	①弦楽器みたいで、楽器。	①本体、ネック、4本出ている所で調整をする。	①W	F+	Mu Orn		Prec Porn
	25"	△	②ドラゴンフルーツ。	②星型みたいなフルーツ。点々、種がありそう。	②D2	F-	Fd		Por
	45"	△	③かっこいい西洋の剣が台座に刺さっている。	③台座があり、剣の持つ柄、羽が何かの装飾。	③W	F-	Orn・ War		Hh Porn
	53"	▽	④もみじの葉っぽい。	④もみじの葉っぱで、ちよんって出ているのが軸。	④W	F-	Bot		N
	1'22" (1'47")	▽	⑤どっかの国とかで売ってそうな民芸品っぽいうちわ。	⑤うちわの持つ所、飾り付いていて、うちわを扇ぐ所。ここ持ってバタバタしている。	⑤W	F-	Imp		N
VII	9"	△	①ボニーテールの、上に向けた女の子が向かい合っている。	①上を向いたボニーテールで、後頭部、前髪がふわっと、鼻、口、顎。<Q>胸でウエスト。腕はない。	①W	M+	H		N
	47"	>	②小さい犬が口から煙が出ている。	②犬の耳、目、顔、体、前足、後ろ足、尻尾。口からモア〜っていう。<何匹?>1匹。<煙?>灰色。	②D1+7	FM- FC' FY	A Sm		Afant Adif
	1'11" (1'40")	▽	③白く抜けている部分が、枕元に置くランプみたいな。	③ランプの傘、土台、傘を支えている胴体。お洒落な感じ。	③DS6	F-	Hh Orn		Porn
VIII	1'17"	△	①お〜、カラフル。 ①アライグマ?木に登っている。	①緑色が木。有り得ない登り方。動物の頭、背中、前足、後ろ足、尻尾です。2匹。<木?>色が緑。	①D1+1 +5	FM+ FC	A Bot	P	Abal
	42"	△	②薄い緑の所にがたいのいい男の人が、片手を突き上げて立っている。	②片腕を上げて、頭、がたいのいい足。2人。バスケットの時のジャンプボールを突き上げるような感じ。	②dr	M-	H		Mi
	1'00"	△	③真ん中の濃い緑が旗みたいな。	③旗で棒。<他にらしさ?>左右に2枚。	③D6+d2	F-	Emb		N
	1'20"	<	④アライグマみたいな動物に。	④アライグマ(①)は別。頭、前足、頭が横向き。	④D1	F+	A		N
	1'47" (2'10")	▽	⑤何かの花っぽいですね。	⑤花、葉っぱ。<Q>赤、オレンジで花っぽいイメージ。下に緑もあるし、茎もあるし。	⑤D2+5	FC+	Flo	P	Pnat
IX	11"	△	①牛	①牛の鼻、輪郭、角、耳がオレンジの濃い所。顔。	①dr	F-	Ad		Hh
	37"	△	②豚	②豚の鼻、耳、頭、豚の顔ですね。	②DS7	F-	Ad		N
	50" (1'45")	△ 回転	③カニの甲羅	③赤い部分が甲羅の一部。赤い色と丸い感じ。足があるとしたら(足を描く動作)。ここが目っぽい。	③D2	FC-	Ad		Adef
X	17"	△	①兎と・・・	①緑色の兎で、耳、顔、前足、胴体、足。	①D11+11	F/C-	A		N
	20" 27"	△	②カニと・・・珊瑚とエビと・・・何だこれ・・・	②カニが4匹。青色の珊瑚が左右に。<Q>ゴツゴツ。周りにエビやカニがいるので、海っぽい。エビは、4匹。赤色で反っていて、緑色のエビ。	②W	FC+ FT	A		Hh
	42"	△	③真ん中の青い所が何か動物っぽいですね。	③何の動物なのかわからない。手、胴体、足。大の字でふら下がって、2匹が手を合わせて、左右に2匹。<add>改めて見ると違うものに見えてくる。<Q>正面から見た兎の顔。耳、輪郭、鼻と口元。顔だけ。	③D10	FM-	A		Abal
	1'02"	△	④細胞みたいな。	④オレンジの部分が核で黄色が細胞質。	④D7+7	F-	Sc		Mi
	1'31"	▽	⑤ヤギの顔。	⑤目、鼻、口元、白いところが。	⑤Ds2	FC'+	Ad		N
	1'56"	<	⑥「く」っていう文字。	⑥「く」って書いてある。	⑥D12	F-	Sign		N
	2'02"	>	⑦ラジオペンチ。	⑦ラジオペンチの持つ所。色が薄い所が挟むところ。	⑦D8	F-	Imp		Hha
	2'14"	▽	⑧両手を頭の上で組んだ人がいる。	⑧頭、手、足。<性別?>あえて言うなら女の人。	⑧d2	M-	H		Mi
	2'32" (2'47")	▽	⑨タツノオトシゴ	⑨緑色。口、顔の辺り。人(⑧)は無視。カニ、エビがあるので、タツノオトシゴもあるって海っぽいイメージ。	⑨d1+1	FC-	A		N

(2) 不変の特徴

SRS 実施後のロールシャッハ法を見ると、量的・質的ともに全体的に安定化の方向を示している。しかし、図版IVで「①ウルトラマンに出てきそうな怪獣」と男性的な力強い反応を見せた後で、続く反応は「②潰れた馬面のコウモリ」と弱々しく、むしろ痛ましいほど陰うつな反応であったりする。図版Vでも同様に、「①ド派手な衣装を着た歌手」と包み込まれ、きらびやかな女性的な世界を見るが、続く反応は「②死にかけの蝶. しおれている」、「③水面ギリギリを飛んでいる鳥」と、活気なく、悲しみを伴った反応、不安定さを感じさせる反応である。男性的イメージ、女性的なイメージが一貫して続いていかないあり方が一部の図版には示されており、男の心と女の心の間での揺らぎは SRS 実施前と比較すると穏やかになっているものの、両者の間で揺れ動く心が完全に消失したわけではないと言える。identity 確立に向けた課題は、SRS 実施の有無にかかわらず残ったままである。

さらに、初回検査時は現実吟味力に大きな崩れは見られないものの、思考の恣意性や作話傾向が見られるなど、色彩刺激に対するコントロールの悪さが見られた。再検査時には、このような統制不良のあり方が緩和され、統制が取れる変化を見せているが、最終図版であるXでは、まとまりのない多色刺激に対して反応数が急激に増加し、形態水準も低くなっている。現実的に対処可能な変化が見られてはいるものの、外からの刺激の強さによっては、コントロールがうまく取れなくなる側面は、変わらず残っていると考えられる。

IV. 考察

1. ロールシャッハ法における性別違和の特徴

SRS 実施前の初回ロールシャッハ法は、現実検討力の乏しさ、攻撃性の高さ、対象関係の障害度、外界イメージの悪さや自己不全感の強さが見られる反応となっており、identity の揺らぎ、混乱とも思われるあり方が如実に現われている。そのような中で、性同一性の混乱が目立つ特徴となっており、攻撃性や衝動性のコントロールができない状況があり、A をかなり不安・不安定にさせている。危うい状況ながらも、境界性人格障害のように、情緒的にアンビバレントな相反する感情が揺れ動くということはない。情緒的に不安定であるが、境界性人格障害の不安定さとは異なり、一定のレベルを維持する自我の力はある。性同一性の障害は明らかであるが、人格の形成において何らかの障害があるとまでは言えない結果である。病理性という点においては、吉野・中平・織田・鈴木・田近・有木・木下 (2008) が GD 者のロールシャッハ法には、現実検討力の低下が見られるが、精神病水準の思考障害は

示唆されないと指摘している結果と合致している。

鍋田 (2000) は、GD の「一部が不安定な人格傾向を伴っていることも事実である」と述べているが、SRS 後の 2 回目のロールシャッハ法では、現実的な対処が可能となり、より適応的な結果を見せていることも含めて考えると、A は比較的安定したパーソナリティであると言える。鍋田 (2000) は、安定した GD の臨床事例の心理的特徴として「思考の固さや感情の抑制傾向が強く、内面的にはかなりうっ積した幻想がうずまいてることが想定されるというのが共通している。しかし、病的なものではない」と言及している。心理検査実施前に A とは簡単な面接を行ったが、自ら積極的に話すというよりも、どちらかと言うと聴かれたことのみで淡々と回答する寡黙なタイプに思われた。しかし、ロールシャッハ法では初回検査時は $R=53$ 、再検査時も $R=45$ とその反応数は豊かであり、特に初回検査時には、ネガティブな情緒的表現を伴った反応が目立ち、その内面には鍋田 (2000) が言うようなうっ積した感情や幻想が秘められていた。再検査時には、この内面にうっ積したものが適応的になる変化を見せたが、GD において、性同一性の混乱と揺らぎを抱えるということは、病的な状態とは異なるものの、うっ積した幻想や複雑な感情を内面に持ちながら、目の前の現実生活には社会的に適応していかなければならず、それは当事者にしかわからない苦悩であると言える。この点を考慮した支援のあり方が求められる。

2. SRS による心理的変容

SRS 実施後のロールシャッハ指標を初回検査時と比較すると、現実検討力の弱さは引き続き見られてはいるものの、反応数は平均の範囲内に収まり、総反応時間は短縮し、F%が増加し、m 反応に見られる心の緊張や葛藤が緩和され、統制力を欠いた CF 反応はなくなり、すべて FC 反応になるなど、刺激に対して現実的な対処が可能になっている。質的分析においても男性の心と女性の心との間を揺れ動く性同一性の混乱がマイルドになり、外界イメージや自己イメージの悪さが、安定化する方向へと変化している。

再検査時のロールシャッハ法からは、性的混乱を伴った反応が減少し、以前よりも現実適応性が良好となっている。SRS を行ったことで身体面における安定が心理的側面の安定に寄与したと考えられ、SRS が心理的適応にも良い影響を与えている。難波(2016, 2021)は SRS に代表される身体的治療によって精神面の安定がもたらされると指摘しているように、SRS は性別に対する身体的・社会的違和を改善する手段になっていると考えられる。

その一方で、SRS 後のロールシャッハ法には「が

たいのいい男の人 (VIII)」という理想像的な男性的な力強い反応が産出されるものの、実際は dr 反応であったり、図版IVやVに見られたように、男性的イメージ、女性的イメージが一貫して継続していかないあり方が示されている。SRS によって性同一性の混乱が完全に消失するといった劇的大変化を遂げるとまでは言えない結果であり、identity 確立に向けた性同一性の揺らぎという根本的な問題は残されたままである。

Erikson, E.H. は、青年期は自分が社会的存在として「何者であるか」ということが重要な心のテーマとなるとし、この年代の発達課題として自我同一性を確立することを挙げている。大学生である A と同世代の大半の学生が一般的に identity を確立し始めていることを考えると、この確立に向けてはそれなりの長い時間とプロセスを要すると考えられ、GD の identity 確立に向けての課題は、SRS によってすぐに解決する類のものではないと言える。

また、Atb 反応や Atf 反応に代表される骨格反応、内臓反応といった身体反応が多く見られ、Affect においても身体的関心に相当する反応が微増するなど、身体的な関心や心気症的な不安は、SRS 後の方が強く示されている。これは、適合手術を受けても完全には満たされることのない身体への不適合感があることを感じさせる。山内 (2001) は、「手術を行ったとしても完全な男や女になれるわけではなく、あくまでも形を似せたある意味では「偽りの性別」である」こと、外科的手術を必要とする GD の身体的希望を叶えることが社会適応を良くするという意味でも「外科的治療は最後の選択と言えよう」と述べている。この山内

(2001) の指摘にあるように、最後の砦とも言える身体的治療を行ったとしても生殖能力など、様々な点で自分の身体には限界があることに改めて直面せざるを得ず、SRS を行った結果としての新たな自分自身の身体を受け入れていかざるを得ない状況が、SRS 後のロールシャッハ法に示された身体に対する不適合感ではないかと考えられる。

3. 今後の課題

本研究は、1 事例の 20 代大学生を対象とし、SRS による心理的変容について検討を行ったものである。先行研究からは、GD における FTM と MTF とでは臨床像の違いや心理特性についての違いがあることが明らかになっており、各年代に応じた心理・社会的課題も異なると考えられる。また、SRS による心理的変容について縦断的に経過を検討していく必要もある。これらの点については、今後の課題としたい。

引用文献

- American Psychiatric Association(2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. Fifth edition.* Arlington: American Psychiatric Publishing.
- 高橋三郎・大野 裕 (監訳) 染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) (2014). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル.* 医学書院, 東京.
- 針間克己 (2021) トランスジェンダーのケア 診断, 治療, 性別適合手術, ホルモン療法. 治療, 103 (2), 235 - 238.
- Klopfer, B. & Kelly, D.M. (1942). *The Rorschach Technique.* New York: World Book.
- Murray, J.F. (1985) Borderline Manifestations in the Rorschachs of Male Transsexuals. *Journal of Personality Assessment*, 49(5), 454-466.
- 鍋田恭孝 (2000) 性同一性障害の診断とアセスメント, 松下正明 (総編集): 491 - 496. 中山書店, 東京.
- 名古屋ロールシャッハ法研究会編(2018)ロールシャッハ法解説 名古屋大学式技法. 金子書房, 東京.
- 中平暁子・吉野真紀・織田裕之・鈴木朋子・田近文・有下永子・木下利彦 (2008) 性同一性障害におけるロールシャッハ・テストの特徴—MTF と FTM の比較から—。ロールシャッハ法研究, 12, 1 - 9.
- 難波祐三郎 (2016) 性別適合手術の現状と課題. *精神科*, 29 (2), 98 - 102.
- 難波祐三郎 (2021) 性同一性障害 性同一性障害に対する外科治療. *医学のあゆみ*, 279(4), 260 - 263.
- 佐々木掌子 (2008) 性同一性障害と心理臨床. *臨床心理学*, 8(3), 341 - 347.
- 庄野伸幸 (2001) 心理検査からみた性同一性障害. *ロールシャッハ法研究*, 5, 29 - 42.
- 土屋由希・二宮ひとみ・岡田弘司・寺嶋繁典 (2009) ロールシャッハ・テストにおける性同一性障害の心理的特徴に関する臨床心理学的研究. *関西大学心理相談室紀要*, 11, 57 - 64.
- Tuber, S. & Coates, S. (1989) Indices of psychopathology in the Rorschachs of boys with severe gender identity disorder: A comparison with normal control subjects. *Journal of Personality Assessment*, 53, 100 - 112.
- 山内俊雄(1999)性転換手術は許されるのか 性同一性障害と性のあり方. 明石書店, 東京.
- 山内俊雄(2001)性同一性障害の治療. 性同一性障害の基礎と臨床, 山内俊雄 (編著): 53 - 60. 振興医学出版社, 東京.
- 吉野真紀・中平暁子・織田裕之・鈴木朋子・田近文・有下永子・木下利彦 (2008) ロールシャッハテストからみた性同一性障害. *心理臨床学研究*, 26(1), 13 - 23.